【論文】

ラフカディオ・ハーン『チタ――最後の島の記憶』を読む
――アイルランドと日本の交点としてのアメリカ――

結城　史郎

はじめに

作家ラフカディオ・ハーンは、日本の文化を国外に広めた人物として、同時に柳田国男ら民族学者の先駆者としても評価されている。その一方、国外の研究者の視点からすれば、日本への関心が高まっていた時期には読者を惹きつけていたものの、今日ではハーンの評価は低調であるとの報告がある[1]。ハーンは19歳でアメリカに渡り、その地で約19年を過ごし、さらにマルティニクで2年、そして日本で14年を過ごしている。そのうちで最も長く逗留したのがアメリカであるが、そのアメリカでもハーンの文学が評価されることはほとんどないという[2]。国外でのこうしたハーンの魅力の低迷は、文学的評価というよりも、国際社会における相互の政治的な力学に負うところが大きい。日本のハーン受容は格別である。

そのような状況の下、ハーン評価の力学のうちでも奇妙な動向として、アイルランドでハーンへの関心が高まってきたことを挙げておきたい。ハーンは父への怨念のためか、アメリカではパトリック・ラフカディオ・ハーンから「パトリック」を除き、ラフカディオ・ハーンと名乗った。あるいは、アイリッシュ・アメリカンに対する「パディ」という、アイルランドの守護聖人パトリックにあてつけた蔑称を避けるための方策であったのかもしれない。いずれにせよ、ハーンとアイルランドとの接続は無視される傾向にあった。が、近年、ハーンとアイルランド文化との交点を探る試みが開始されてきた。その幕開けがポール・マレーのハーン論『ファンタスティック・ジャーニー』(1993)で、ハーンがアイルランド人であることを前提としている。マレーの著書の序文で日本の平川祐弘氏も、ハーンの物語の背後に潜むアイルランド文化を指摘している。ハーンの再話物語の背景にはアイルランドの伝説があり、また彼の異文化論の背景にもアイルランドの文化が認められるという[3]。

実のところ、ハーンの日本での著作は異文化論と再話文学である。前者は『知られぬ日本の面影』(1894)、『東の国から』(1895)、『心』(1896)などで、後者は『骨董』(1902) や『怪談』(1904)などである。いずれもハーンがアメリカやマルティニクで試みていた作風にその萌芽が認められよう。アメリカでもすでに異文化論や再話物語を書いていたのだ。彼が日本に来てほどなくして日本文化論を語ることができたのも、日本についてのピエール・ロティなどの書物に負うものであったかもしれない。おそらく日本での文筆の前に、アメリカでの試みがあり、その下地にアイルランド文化の影響があったのであろう。アメリカはアイルランドと日本の交

点として位置づけられよう。

本稿ではそうした文脈を念頭に、ハーンがアメリカのルイジアナ州ニューオーリンズで創作したという、中編小説『チタ』(1889)を読むことにしたい。そのため最初にこの物語を包み込む、クレオール文化について述べたい。次に、『チタ』の物語の主要なテーマである海について考察し、ハーンの日本での再話物語への伏線となる側面を読み取ることにする。また物語を支える霊の問題を検討したい。そして最後に、『チタ』の背後に揺曳するケルト文化に論を向けることにする。こうしてハーンとアイルランドを接続する可能性を探るつもりである。

１．ハーンとクレオール文化

ハーンの渡米先の最初の都市はオハイオ州のシンシナティであった。1869 年のことで、アメリカでは大陸横断鉄道が開通したこともあり、この都市にはドイツ系やアイルランド系の移住者が多かった。ドイツ人は経済破綻という事情から、アイルランド人は 1845 年に起こった大飢饉によるものであった。ハーンもそうした移民の一人でありながら、印刷工のヘンリー・ワトキンという人物に助けられ、ほどなくして新聞社で雇用され、ジャーナリズムの世界に入る。このころのシンシナティは治安も悪く、犯罪も数多かった。そうした犯罪記事を任されたのがハーンである。彼の記事が人気を博したのは、事実の報道よりも、記事を巧みに物語化してみせ、読者に強烈なインパクトを与えたためである。

ハーンは異文化に対する関心が高かった。結婚もムラートの女性マティ・フォリーとであった。当時のオハイオ州では白人と異人種との結婚は認められず、違法な結婚として弾劾された。新聞社から解雇され、結婚も破綻している。にもかかわらず、ハーンの関心はつねに下町のくすんだ情景に向けられ、別の新聞社に移り、同じような記事を書き続けた。そして異文化への関心はニューオーリンズに移ってからも変わらず、その地のクレオールの文化と接触しながら試みたのが中編小説『チタ』であった。

物語は３部構成で、以下のとおりである。まず、第１部「デルニエール島の伝説」(The Legend of L'Île Dernière）では、語り手である「私」が蒸気船に乗り、ニューオーリンズ沖にある行楽地グランド島へと向かっている。その目にはまさしく南海の光景が入ってくるが、目的地を前にして、今は荒廃したデルニエール島に関心が向けられ、その島の惨劇が話題にされる。1856 年 8 月 10 日のこと、ハリケーンに襲われ、一瞬にして廃墟と化したという。語り手の私は老水夫からその話を聞きながら、その惨劇を心の内で描き出す。「デルニエール島」は、副題では「最後の島」(last island)とあり、波に浸食されている無人島であることから、しばしば「失われた島」(lost island)と訳されるという [4]。

第２部「海の力から」（Out of the Sea's Strength）では、このハリケーンの折、５歳の少女がスペイン出身の漁師フェリウ・ビオスカ夫妻に救われたことが語られる。身元が不明であっ

たため、救出してくれたビオスカの家族としてグランド島で育てられることになる。その子は母親の体にしがみつき、漂流しているところをフェリウに発見され、幸運にも一命をとりとめたのだ。彼女の両親はクレオールで、フランス語を話していたらしいが、詳細は明かされていない。こうしてスペイン漁師の亡き娘にちなんでコンチタ、もしくはチタと呼ばれ、泳ぎを覚え、島の暮らしに少しずつ溶け込んでいった。チタは海の力を恐れながらも、その海の力によって育まれていった。

第３部「高潮の影」（The Shadow of the Tide）では、その惨劇から 11 年が経過した 1867 年、ニューオーリンズで医者として働いているジュリアンが、グランド島にやってくるところから始まる。知人の治療にあたるためであったが、その人物はすでに手遅れで亡くなっていた。それに加え、ジュリアン本人もマラリアに倒れ、夢うつつのうち、自分を看病してくれているチタの容姿と妻との類似に驚き、不思議に思いながらも意識が朦朧として、娘と認知できないまま、あっけなく亡くなってしまう。

この物語にはこれまでのハーンに特徴的な煽情的な記述もある。ハリケーンのために亡くなった人々から金目の物を盗む略奪の場面である。若い娘が婚約指輪をしているが、その指輪が外せないため、指が切断される。またイアリングが外せないため、耳が切り取られてしまう。あるいは容赦なく女性の衣服を剥奪する。これらはハーンが好んだ新聞記事の口調で描かれており、シンシナティ時代のハーンの手法と合致している。先に述べたように、彼は残忍な記事を好んで収集し、読者に戦慄を与えるような物語化を得意としていた。『怪談』の巻頭の物語「耳なし芳一」における、耳がもぎ取られる場面を想起してもいい。

さらに興味深いのは言葉の混在である。英語で語られながら、そこにスペイン語やフランス語、あるいはクレオール語が入り込んでいる。これはニューオーリンズの特徴である。たとえば、チタがジュリアンを看病しているところでの会話では、英語の間にイタリック体のスペイン語が入りこんでいる。

> —“Mamma does not understand French very well.”
> —“*No importa, Chonchita;—le hablaé en Español.*”
> —*“Bien, entonces!”* she responded, with the same exquisite smile. “*Adios, señor !*” [5]

ルイジアナ州は合衆国に組み込まれる以前、フランスやスペインの領土として栄えていた。これら西洋の文化を受け継ぐ子孫たちはクレオール、その訛りのある言葉はクレオール語と呼ばれている。クレオールは多元的な文化を包摂している。そうした文化を背景に、実母がフランス語、養母がスペイン語を話すのに対し、幼少期のチタは黒人の乳母の使用していたフランス語なまりのクレオール語を、そしてスペイン語や英語もやがて覚えるようになる。このよう

に当時のニューオーリンズは、多言語・多文化の混在する都市であった。アイルランドとの関係で想起されるのがジェイムズ・ジョイスで、トリエステ、チューリヒ、そしてパリという都市でハーンと同じような経験をし、60 以上の言語で構成された『フィネガンズ・ウェイク』(1939)を書くことになる。

ニューオーリンズが文学都市であったわけではない。アメリカ文学はニューヨークやボストンを中心にしていた。それでもジョージ・ワシントン・ケイブルのように、ハーンを刺激する文学者もいた。第二次大戦後には、ウィリアム・フォークナーやテネシー・ウィリアムズなど著名な作家によって、際立つこととなる都市でもある。さらに彼方のカリブという世界そのものの魅力も、いずれデレック・ウォルコットやV. S. ナイポールといったノーベル文学賞の受賞者によって舞台とされることになる。ハーンはローカル文学の先駆けであった。『チタ』の背景もメキシコ湾であり、その背後にはカリブ海がある[6]。

２.『チタ』と海

事実、この物語はニューオーリンズからその沖合の島々を対象とし、海がその大きなテーマとなっている。ハーン自らも海で泳ぐことを楽しみにしており、海は彼にとって親しい存在であっただろう。『チタ』の巻頭には、ヴィクトル・ユーゴーの「大洋」という詩が引用されている。

Je suis la vaste mêlée —
Reptile,étant l'onde; ailée,
Étant le vent, —
Force et fuite, haine et vie,
Houle immense, poursuivie
Et poursuivant. (AW 76)

ユーゴーの詩にも記されているように、海はまさしく巨大な力を持つ存在である。平川祐弘氏が"Hearn and the Sea" で指摘しているように、海はいわば万物の母でもある[7]。そして『チタ』においても以下のような描写がある。"Sea" という大文字の使用や"thou" という呼称にも明らかなように、海は太古から連綿と存続する生命として擬人化されている。

. . . Thou primordial Sea, the awfulness of whose antiquity hath stricken all mythology dumb;—thou most wrinkled diving Sea, the millions of whose years outnumber even the multitude of thy hoary motions;—thou omniform and most mysterious Sea, mother of the monsters and the

gods,—whence shine eternal youth? Still do thy waters hold the infinite thrill of that Spirit which brooded above their face in the Beginning!—still is thy quickening breath an elixir unto them that flee to thee for life,—like the breath of young girls, like the breath of children, prescribed for the senescent by magicians of old,—prescribed unto weazened elders in the books of the Wizards. (AW 133, emphasis added)

海は破壊と抱擁という二つの生命力として表象される。『チタ』の物語を形成しているのもその二つの力である。少女チタはハリケーンによって両親を奪われている。彼女が海に対して恐怖を抱いているとしても不思議ではない。ハリケーン当日の海は、まさしくリヴァイアサンのような巨大な大浪となって荒れ狂い、デルニエール島を破壊した。そのため海はまさしく「悪夢」のような存在として、チタの意識にも刻印されている。

And the tumultuous ocean terrified her more and more: it filled her sleep with enormous nightmare;—it came upon her in dreams, mountain-shadowing,—holding her with its spell, smothering her power of outcry, heaping itself to the stars. (AW 131, emphasis added)

そのため養父はチタを海に連れて行き、海に投げ込むことで、海への恐怖を彼女から取り除くことにする。そしてチタは次第に海に抱かれる喜びを味わえることになる。海は「悪夢」であるだけでなく、人々を「愛撫し治癒する力」でもある。こうしてチタは少しずつ、海の息吹をその若い血潮に取り込むこととなる。

The sea appeared to her as something that had become tame for her sake, something that loved her in a huge rough way; a tremendous playmate, whom she no longer feared to see come bounding and barking to lick her feet. And, little by little, she also learned the wonderful healing and caressing power of the monster, whose cool embrace at once dispelled all drowsiness, feverishness, weariness . . . Her delicate constitution changed;—the soft, pale flesh became firm and brown, the meagre limbs rounded into robust symmetry, the thin cheeks grew peachy with richer life; for the strength of the sea had entered into her; the sharp breath of the sea had renewed and brightened her young blood. . . . (AW 132-33, emphasis added)

海に対するハーンの眼ざしは、アイルランドから受け継いだものであるらしく、ニューオーリンズのみならず、日本でも海への郷愁を抱いている。『東の国から』においても、海はまさしく母のような存在として想起されている。

> I have memory of a place and a magical time in which the Sun and the Moon were larger and brighter than now. Whether it was of this life or of some life before I cannot tell. But I know the sky was very much blue, and nearer to the world,—almost as it seems to become above the masts of a steamer steaming into equatorial summer. The sea was alive, and used to talk,—and the Wind made me cry out for joy when it touched me. Once or twice during other years, in divine days lived among the peaks, I have dreamed just for a moment that the same wind was blowing,—but it was only a remembrance. [8]

この海の記述と関わるのが浦島伝説である。ハーンはウィリアム・ジョージ・アストンやバジル・ホール・チェンバレンの翻訳によって浦島のことを知っていたらしく、海からの連想ですかさず心の内でその物語に耽っている。そして浦島を受け入れた乙姫を夢想し、まさしく海を女性として連想するのである。ハーンにとっての海は離別した母親とも連なり、郷愁を掻き立てられたのであろう。にもかかわらず、ハーンは浦島の最期の煙による安楽死に疑義を唱え、西洋ではそのような結末は許容されないと語っている。

浦島の問題をめぐるハーンの発言の背景には、梅本順子氏が指摘しているように [9]、アイルランドのアシーンにまつわる神話がある。アシーンも浦島と同じく、美しい女性ニーヴの住む、常若の国へと誘われながら、郷里に戻り、その変貌に愕然としている。浦島とほとんど変わらないが、アシーンが老いたのは、村人の苦難を助けることにあったためで、絶望して自決することを由とはしていない。ハーンの浦島伝説の読みには疑義もあるが、あるいはその疑義のため、海の象徴する女性への郷愁が際立っている。したがって、『チタ』に散りばめられた母なる海には、母親との離別という、アイルランドと関わるハーンの心象風景が投影されていると思われる。

ハーンが母としての海のイメージに固執するとき、それは単なる象徴であるだけではなく、その海との交信という側面もある。『チタ』においても、海から吹きつける風に身をくねらすグランド島の樫の木の情景は、まさしく女性になぞらえられている。

> A group of oaks at Grande Isle I remember as especially suggestive: five stooping silhouettes in line against the horizon, <u>like fleeing women with streaming garments and wind-blown hair</u>,—bowing grievously and thrusting out arms desperately northward as to save themselves from falling. (AW 81, emphasis added)

３．『チタ』と霊

ところで、『チタ』には興味深いところが多々ある。とりわけ物語として父ジュリアンと娘チタとの間に、認知の瞬間が訪れないところが挙げられる。二人を結ぶ糸は過去に二度あったと思われる。一度目はチタが救助されて 10 日目のこと、ラルッセルという人物が救助隊員として、フェリウの家の前でチタと面談したという偶然である。そのとき彼はチタがジュリアンの娘であることを認識したはずであるが、彼はジュリアンと関わる情報を秘匿している。彼はクレオール語で話しかけ、その娘の名前はユーレイリ、母の名前はアデール、父親の名前はジュリアンであると同行者に告げるが、そんな名前はルイジアナでは平凡であり、手がかりにはならないと一蹴する。

ラルッセルとジュリアンはアデールをめぐり争ったこともあった。そのようなつながりを念頭におくなら、ラルッセルの発言はジュリアンへの怨念とも響く。その一方、娘の母親の遺体が発見され、その指輪から、一家全員が亡くなったとして、ジュリアン・レイモンド・ラ・ベール医師一家の墓石が建てられていた。嵐の晩、ジュリアンは運よく船に救助されたが、彼がニューオーリンズに姿を見せるのは半年後のことであった。ジュリアンが亡くなったとの事情に鑑み、ラルッセルはチタがジュリアンの娘であると考えなかったのかもしれない。

そのジュリアンが知人を往診するためにグランド島を訪れ、自らマラリアにかかり、チタの看病を受けることになる。11 年後のことである。このとき、チタを見たジュリアンはすぐさま、その娘が妻アデールの生き写しであることに気づいている。これは奇跡的な偶然である。その目、眉、唇、髪、声音などから、妻が蘇ったと思い驚愕している。さらに彼はチタに娘と同じ耳の痣を認知している。それでも彼はこれが超自然の瞬間であると想像し、墓からの亡霊であるとの想いに囚われるだけであった。

実のところ、ジュリアンの「理性」(Reason)は、チタが妻の再来であることを否定する。そして彼は自らを「馬鹿な奴」（Fool）と呼び、歳月の流れに鑑み、この遭遇を自らの妄想として得心してしまう。これはまさしく運命の「偶然の一致」(Coincidence)にすぎないとさえ想うが、奇妙なのは、その娘が自らの娘と類似しているにもかかわらず、娘自身であることに連想が及ばないことである。

ひるがえって、南北戦争の折、ジュリアンがラルッセルの死を看取る前、ラルッセルはジュリアンにデルニエール島のハリケーンで生き延びた女の子がいたという話をしている。その子についての素性についてラルッセルは黙して語らず、曖昧のままに終わってしまった。恋人をめぐる争いを忘れられず、ラルッセルはジュリアンにいまだ怨念を抱いていたかもしれない。ともあれ、夢うつつのままのジュリアンは、ラルッセルの当時の話をつゆ知らず想起している。これは二度目の糸が訪れた瞬間である。彼はこう回想している。

> That bivouac-night before the fight at Chancellorsville, Laroussel had begun to tell him such a singular story . . . Chance had brought them,—the old enemies,—together; made them dear friends in the face of Death. How little he had comprehended the man!—what a brave, true, simple soul went up that day to the Lord of Battles! . . . What was it—that story about the little Creole girl saved from Last Island,—that story which was never finished? (AW 144, emphasis added)

この直後、ジュリアンは覚醒と妄想との間をさまよい、チタの養母カルメンに看取られ亡くなってしまう。チタとジュリアンが親子関係にあることを知っているのは、亡きラルッセルを除くなら、語り手と読者のみである。したがって、物語が父娘の再会というハピー・エンディングで閉じることはない。チタが自らの出自を知りえたとしても、彼女の人生が変わるはずのものでもない。大切なのはむしろこれからの人生であり、個人を包み込む様々な文化の中での交流である。死を前にしたジュリアンの意識の流れには、彼が歩んできた人生を示唆するかのように、多様な言葉が転写されている。

ジュリアンはハリケーンに襲われ、奇跡的に救出されて 6 ケ月が経過した後のこと、ニューオーリンズに姿を現す。彼を知る人は驚き、亡霊のような存在として、接触を避ける。そしてジュリアン自身も墓場を訪れ、自分を含む一家の墓石を目にしていた。このときジュリアンは、宇宙という広漠たる世界と比べ、自らの存在がきわめて矮小なものであることをすでに認知していたのであろう。そのときのジュリアンの心境は以下のように描かれている。

> . . . Seldom, indeed, does it happen that a man in the prime of youth, in the possession of wealth, habituated to comforts and the elegances of life, discovers in one brief week how minute his true relation to the human aggregate,—how insignificant his part as one living atom of the social organism. Seldom, at the age of twenty-eight, has one been made able to comprehend, through experience alone, that in the vast and complex Stream of Being he counts for less than a drop; and that, even as the blood loses and replaces its corpuscles, without a variance in the volume and vigor of its current, so are individual existences eliminated and replaced in the pulsing of a people's life, with never a pause in its mighty murmur. (AW 117, emphasis added)

したがって、ジュリアンとチタの再会の機会が与えられないという場面から、この物語の悲劇を読み取ることはできない。宇宙の営みを前に、個々の人間の死は悲劇ではない。むしろ、個人の背後に潜む自然のエネルギーと連綿と続く人類の存続との関わりこそ、作者ハーンのテーマであったと思われる。ハーンは個人の物語を描くよりも、個人を連結する記憶や集合的無意識の存在へと、読者の関心を向けていったと言える。こうして霊の住む異界との交流という

ハーンの哲学が生まれている。人は亡くなると同時に、この世と断絶してしまうわけではなく、異界において新たな生を受けるということだろう。

４．『チタ』とケルト文化

ハーンは日本において幽霊物語を好んでいた。その趣向は『チタ』を創作する以前の『中国幽霊譚』(1887) にも明らかである。幽霊は単なるホラー的な物語への道具であるのではなく、異界からの来訪者として捉えられている。幽霊の登場はこの世とどこかで繋がっている、そんな異界を想起させる役割を担っている。

『チタ』では異界は海にある。海は溺死した人、亡霊など様々な声を持ち、それらの声が入りまじった音を奏でている。語り手の「私」にもその声が届き、「ブルターニュの不思議な幻想」を想起しながら、その情景が以下のように描かれている。

> And as I listened to him, listening also to the clamoring of the coast, there flashed back to me recollection of a singular Breton fancy: that the Voice of the Sea is never one voice, but a tumult of many voices—voices of drowned men,—the muttering of multitudinous dead,—the moaning of innumerable ghosts, all rising, to rage against the living, at the great Witch call of storms. . . . (AW 82-83, emphasis added)

死者たちの声を持つ海は異界とも言える。その世界との交信は、人々の意識に堆積している記憶であるだろう。民話や伝説はそうした集合的無意識の記憶である。アイルランド神話のアシーンの物語も、あるいは日本の浦島伝説も、民族の記憶であるだろう。『チタ』における３部構成にはそれぞれ意味深長なタイトルが付されている。第１部は「デルニエール島の伝説」、第２部は「海の力から」、第３部は「大潮の影」である。シニフィアンとしての海に対応するシニフィエは、擬人化された海である。

この物語のタイトルは「チタ」であるが、チタの成長についてはわずかに語られるのみで、その心の内が描かれることはない。むしろ養母カルメンや実父ジュリアンの方が深みがある。そのような事情もあり、『チタ』の評価は芳しくない。筋を構成する人物が不在なのである。それに加え、語り手として第１部に登場した「私」も、次第に影を潜め、第２部や第３部ではいつの間にか全知の語り手に変更されている。物語の構成という面からしても、統一性が欠けているように思われる。読者が違和感を抱いたとしても不思議はない。

しかしながら、この物語の主人公はむしろ海であり、副題の「記憶」は海鳴りの意であるかもしれない。チタを含め個々の人物たちは、いずれも海のつぶやきの中の小さな要素であるだろう。チタは実母を失い、海に寄り添う養母とともに暮らし、クレオール語からスペイン語、

さらに英語も覚えることになる。両親とは異なる文化にありながら、海に包まれ、新たな生命力を獲得している。

どうやら『チタ』という物語には、ハーンの来歴が重なっているらしい。ハーンも自らの文化から離れ、新たな風土に溶け込み、その風土から生命力を培ったのである。チタはハーン自らの存在を投影した人物であると思われる。平川祐弘氏によると、ハーンの物語には、読書によって着想を得たものと同時に、個人的な経験に基づくものがあるという。後者は「浦島物語」や「お貞の話」などが相当する[10]。そうであれば、ハーンはチタに個人的な経験が込めていると捉えることもできよう。すなわち、異文化で暮らしながら、その文化の土壌に育まれる自らの姿を示唆したかったのだろう。

小泉凡氏は、ハーンのケルト文化への関心が来日後に開花したとして、以下のように指摘している。

> ハーンは来日前には影を潜めていたアイルランド時代についての言及が現れ、1892 年 6 月 1 日付けの遺書にはニューオーリンズ時代以降、決して使わなかった“Patrick” というファーストネームをミドルネームとして記している。また小泉家でみつかった 1903 年 12 月 14 日付けの横浜クロフォード社の伝票からは、ハーンが人生最後のクリスマスにアイルランドやイギリスのクリスマスには欠かせぬクリスマス・プディングを 15 円 48 銭というまとまった額を支払って 20 ポンドも注文したことがわかる。ハーンにとって出雲の語り部セツとの新婚旅行は、自らの中にあるケルト性、アイルランド性を再発見する契機になったといえるのではないだろうか。[11]

ハーンが日本文化にアイルランド文化との類似を認めとする、小泉氏のこの指摘はきわめて興味深い。が、アイルランド文化への関心はニューオーリンズの時代においてもすでにあったと考えたい。そもそも『チタ』における海の情景には死者たちの霊が読み込まれている。それに加え、物語は「ブルターニュの不思議な幻想」によって着想されたとされている。ブルターニュはケルト文化の栄えた地域であり、ハーンはその民話に惹かれていたらしい。そしてハーンは「イスの町の水没」という伝承を想起していたはずである。

イスの町はブルターニュの西端に位置し、トリスタンとイゾルデの悲話で著名なトリスタン島を抱く湾の内側に、水門で囲われた町であった。この町はグラロン王の下、繁栄を享受していたが、王女ダユーは淫乱な悪魔のような娘であった。そしてダユーはあるときのこと、水門を開き、町を沈めることにした。こうしてイスの町は高潮に飲み込まれて水没し、ダユーも人魚になり、海には溺死した人々の呻き声が聞こえるという話である。この民話が『チタ』の背景にあることは間違いない。デルニエール島での惨劇も、ホテルで華やかな演奏が繰り広げら

れている折のことで、イスの町の水没の最後の情景とよく似ている。

実のところ、この時期のハーンはケルト神話に関心を抱いていたようである。事実、富山大学のヘルン文庫には、ハーンがアメリカで集めたとされる、ポール・セビヨやテオドール・エルサール・ド・ラ・ヴィルマルケの著書が収められている。とりわけラ・ヴィルマルケのブルターニュの歌である『バルザス・ブレイズ』には、イスの町の水没の物語が含まれている。これまでにブルターニュへのハーンの関心については指摘されているが[12]、『チタ』もケルト文化と繋がり、クレオールの物語へと巧みに再話化されていると考えたい。ハーンの育ったダブリンにはチャペリゾッドという地区があり、トリスタンとイゾルデの悲話を想起させている。したがって、ハーンがこのダブリンからコーンウォールへ、さらにトリスタン島を抱くイスの町へと連想を広げていったとしても不思議はない。ハーンにはそうした文脈を知っていただろう。

おわりに

ハーンとアイルランドとの関係は、近年、アイルランドのハーン研究者によって指摘されるようになった。ハーンは『詩論』の「妖精文学」において、W. B. イェイツの詩「風の群れ」（1899） や劇『心願の土地』(1894)、あるいはサミュエル・ファーガソンの詩「妖精の茨」などを賛美している。さらに彼は友人のチェンバレンに宛て、ジョゼフ・シェリダン・レ・ファニュの「渡り鳥―愛の物語」や『アンクル・サイラス』(1864) などを読むように薦めている。あるいはハーンが長男に語り聞かせた物語の多くも、アンデルセンやグリムと並び、アイルランドの民話や伝説であったことも指摘されている[13]。

ハーンの民話への関心はアイルランドにかぎったことではない。アメリカにおいても『飛花落葉集』(1884) において、エジプト、ポリネシア、エスキモーなどの民話を収集している。また『中国幽霊譚』においては中国の民話を扱いながらも、独自の再話の手法を用いている。にもかかわらず、ハーンは自国アイルランドの民話を扱うことはなかった。これはハーンがアイルランドの民話を忌避していたということではない。むしろアイルランドの民話に憑かれながらも、自らが根を下ろした風土において、その文化に溶け込みながら、独自の再話を試みるためであっただろう。

その一方、ハーンの再話の背景には、西洋の倫理観で潤色されている作品も大きい。先に述べた日本の浦島伝説への疑義も、ハーンの倫理観によるものである。あるいは「お貞の話」にしても、太田雄三氏の指摘するように、「西洋の読者の道徳感情への配慮の変更」がなされている[14]。ハーンの意識には「西洋」、なかんずくアイルランド文化が潜んでいたことは間違いない。かくしてハーンの再話は、原話の異国的な要素を提示しつつも、同時に西洋の読者を念頭に入れた変更という観点で読まれるべきだろう。

注

[1] Rie Askew, "The Critical Reception of Lafcadio Hearn outside Japan," *New Zealand Journal of Asia Studies* 11.2 (2007): 44-45.

[2] John Clubbe, "Hearn as an American Writer," *Lafcadio Hearn in International Perspectives*, ed. Sukehiro Hirakawa (Kent: Global Oriental, 2007) 94.

[3] Sukehiro Hirakawa, "Lafcadio Hearn: Towards an Irish Interpretation," *A Fantastic Journey: The Life and Literature of Lafcadio Hearn*, by Paul Murray (Kent: Japan Library, 1993) 1-12.

[4] Robert L. Gale, *A Lafcadio Hearn Companion* (Conneticut: Greenwood, 2002) 32.

[5] Lafcadio Hearn, *American Writings* (New York: Library of America, 2007) 143. *Chita: A Memory of the Last Island* からの引用はこの版を使用する。以降、引用の際には、AW とし、その後に引用ページを記す。ここでは、AW 147 となる。

[6] 風呂本惇子編、『アメリカ文学とニューオーリンズ』（鷹書房弓プレス、2001）参照。なお、この本には含まれていないが、マーク・トウェインは *Life on the Mississippi* (1883)の"The Metropolis of the South"でニューオーリンズを讃えている。Clubbe, *Lafcadio Hearn in International Perspectives* 96 も参照。

[7] Sukehiro Hirakawa, "Hearn and the Sea," *Lafcadio Hearn in International Perspectives*, ed. Sukehiro Hirakawa (Kent: Global Oriental, 2007) 41-54.

[8] Lafcadio Hearn, *Out of the East: Reveries and Studies in New Japan* (New York: Tuttle, 2006) 24-25.

[9] 梅本順子、『浦島コンプレックス』（東京：南雲堂、2000 年）、140-44。

[10] Hirakawa, *A Fantastic Journey* 4.

[11] 小泉凡、「ラフカディオ・ハーンにおける口承文化の受容と継承」、中央大学人文科学研究所編、『ケルト　口承文化の水脈』（東京：中央大学出版部、2006 年）441。

[12] Simon J. Brenner, introduction, *Lafcadio Hearn's America: Ethnographic Sketches and Editorials*, ed. Simon J. Brenner (Kentucky: UP of Kentucky, 2002) 33.　梁川英俊、「ラフカディオ・ハーンとブルターニュ ―ニューオリンズにおけるハーンとフランス民俗学の出会い― 」、『ヘルン研究』創刊号、(富山：富山大学、2016 年): 83-94。

[13] Sean G. Ronan, "The Horror and Ghostly Writings of Lafcadio Hearn," *Irish Writing on Lafcadio Hearn and Japan: Writer, Journalist and Teacher*, ed. Sean G. Ronan (Kent: Global Oriental, 1997)140-53.

[14] 太田雄三、『ラフカディオ・ハーン―虚像と実像』（東京：岩波書店、1994）176。